《コントラバス協奏曲》《交響曲第1番》

—— 創作から83年、待望の世界初演 !

《ピアノ協奏曲第3番 変イ長調 神風協奏曲》

—— 平成の人気呼ぶ !

大澤壽人(1906～53)の創作期は、Ⅰ:留学前(22～29年)、Ⅱ:ボストン・パリ留学(30～35年)、Ⅲ:帰国から終戦まで(36～45年)、Ⅳ:戦後から晩年まで(45～53年)の4期に区分される。

Ⅰ期の大澤は関西学院で学んだ。音楽活動とキリスト教の勉強に熱心で、関西の学生音楽界で知られる一方、同学院オルガニストと日曜学校教師を務めた。高等商業学部を卒業した30年、宣教師らの勧めによって渡米。

5年3ヶ月に及ぶⅡ期は、34年9月を境にボストンとパリに分かれる。ボストン大学音楽学部では独学だった作曲を正式に習い始め、直ちに頭角を現した。32年からはニューイングランド音楽院にも籍を置き、両校において日本人初の作曲専攻生となった。

ボストン時代は才能が開花し、西洋の作曲法を完璧に身につけ、同地で注目の新進音楽家にまで一挙に成長した点で、非常に重要である。33年に日本人として初めてボストン交響楽団(ボストン・ポップス・オーケストラ)を指揮したことをはじめとして、大澤が成し遂げた「日本初」は生涯に数多い。

《コントラバス協奏曲》(34年)、《サクソフォーン協奏曲》(47年)、《トランペット協奏曲》(50年)は、それぞれの楽器の日本初作品。指揮本邦初演は、ベルリオーズ《序曲 リア王》(36年)やラヴェル《クープランの墓》(40年)など。メノッティ《電話》は訳詞・編曲・指揮を手がけ、53年にラジオで初放送した。

さて、ボストンでの創作は32年末から圧倒的な勢いを見せ、「交響4部作」と呼ぶべき大作が次々と生まれた。卒業作品《ピアノ協奏曲第1

番 イ短調》とバレエ組曲《3つの田園交響楽章》。本日初演の《コントラバス協奏曲》と《交響曲第1番》を加えた4曲だけでも総譜枚数500超。戦前の日本洋楽史上に燦然と輝く作品群であり、作・編曲合わせて1000に近い総作品のうち、演奏会用の多くがこの時期に作曲された。

斬新な作風は、当時の音楽先端都市ボストンの文化に影響を受けている。ボストン響定演には「現代音楽」が常に含まれており、大澤はそれらを浴びるように聴いた。また、33年にベルリンから移住したA.シェーンベルクに、日本人作曲家として初めて接し、多大な感銘を受けた。調号を捨てた「無調」作品が生まれたのもこの頃である。加えて、「ウルトラモダン」を標榜するアメリカ急進派の作曲家たちの活動に、同調以上のものを感じていた。

34年4月18日完成の《**コントラバス協奏曲**》は、同楽器の名手として知られたボストン響指揮者S.クーセヴィツキに献呈。総譜を持って同響練習場を訪れている。以前には、彼の指揮で定演プログラムとして《ピアノ協奏曲》を初演する話が出ていたが、大澤はパリ留学が近かったため叶わず、パリから一時帰国して再渡米を考えた。

しかし将来への夢と計画は、第二次世界大戦に向かう時代に阻まれる。帰国後の大澤は欧米楽壇で活躍できる実力を持ちながら、戦後を待たねばならなかった。そして、ようやく渡米が考えられるようになった頃に急逝し、「交響4部作」のいずれも聴くことが出来なかったのである。

《コントラバス協奏曲》の特徴は、第2・3・4楽章に用いられる「四分音」である。1オクターヴを12等分する半音以下の微細音程で、当時、最先端の作曲法の一つだった。初めて取り入れた《チェロとピアノのためのソナタ》(32年)の初演時には地元紙で話題になったほどで、《ピアノ五重奏曲》(33年)を経て、同協奏曲へと続く。高度な技術をコントラバス独奏に要求するこの作品は、30年代の前衛性や西洋的形式感と拍節のない日本的な「間合い」の感覚が融合し、きわめて独創的である。調号を持たない5楽章から成り、大澤は全体を3部として「Ⅰ:1楽章、Ⅱ:2・3楽章、Ⅲ:4・5楽章」と示した。

第1楽章：アレグレット・モデラート。序奏と短いコーダを持つソナタ形式。フルートとハープが響く中、直ちに独奏が登場する。拍子が3/4から4/4へ、中心音がソからファ#へ移った所から、提示部の第1主題が始まる。以下、各部分の中心音の配置が端正なソナタ形式を示す一方で、第1主題部だけでも3/4→3/8→2/8と拍子がめまぐるしく動く。鎮まって冒頭を回想するカデンツァ後、非常に速いコーダに入り一気に終わる。

第2楽章〈モノローグ〉：モデラート。能管を思わせるような冒頭のピッコロを受け、独奏が語り始める。小節線は省かれ、日本的な「間」の感覚が感じられる「独白」は、四分音の聴きどころである。オーケストラが入ってくると、静寂を思わせる巧みな楽器法で、最弱音のうちに消えていく。

第3楽章〈アリア〉：アンダンテ・ノン・トロッポ。3部分形式。ファを中心にしたバルカローレ風音型に乗り、オーボエが歌い始め、弦に渡され、独奏が入ってくる。オペラの「アリア」ではなく、懐かしい「歌」の味わいを持ち、中間部分では独奏のフラジオレットが際立つ。

第4楽章〈ダイアローグ〉：モデラート・エスプレッシーヴォ。オーボエとハープに導かれて、独奏がすぐ入る。短いが印象的な楽章で、独奏の2声が「対話」を表している。

第5楽章〈フィナーレ〉：アレグロ・コン・ブリオ。ソナタ形式。独奏が軽快に2/2の第1主題を奏して、提示部がいきなり始まる。独奏のカデンツァは2回あり、展開部の最後部では「自由に」、終盤近くでは「きわめて表情豊かに」と指示されている。

《ピアノ協奏曲第3番　変イ長調　神風協奏曲》はⅢ期の作品で、1938年5月に完成。翌6月24日に大阪朝日会館における「大澤壽人作曲指揮 愛国交響大演奏会」で、大澤指揮の宝塚交響楽団とピアノ独

奏マキシム・シャピロによって初演された。副題は朝日新聞社所有飛行機「神風号」を指している。

36年に帰国した大澤は帰朝演奏会以降、年に2回、東京と大阪で作品発表と指揮の会を開催していた。だが日中戦争下の38年には、早くもこの「愛国交響大演奏会」1回のみとなる。巷では《愛国行進曲》が大流行という時世で、《第3番》は「神風応援歌の一節位は期待した聴衆が[出てこないので]唖然としていた」と酷評された。現在の私たちが作品から受ける爽快なスピード感や協奏曲としてのスケールの大きさは、全く理解されなかったのである。戦後になって、大澤の指揮と教え子の女流ピアニストによって2回ラジオ放送されたが、以後半世紀にわたって大澤家の蔵で眠っていた。

作品はボストン以来の3楽章構成「ソナタ形式 ー 中間楽章 ー ロンド形式」をとり、再び調号を用いている。独奏のグリッサンドは飛行機の雄飛とされるが、大澤は種々のピアノ作品でその表現を追求していた。《第1番》には両手を交差させる類のないグリッサンドが見られ、豪放な《第3番》はそうした試みの延長線上にある。

第1楽章：ラルゲット・マエストーソ。序奏とコーダを持つソナタ形式。冒頭の「ラ♭ーミ♭ーファ」とそれに続くファンファーレ風の「タターン」が短いモットー音型となり、楽章中に終始登場して力感を与える。第1・第2主題は共に9/8で、経過的性格の変ホ長調とジャズ風のハ短調の両旋律が、伝統的な調関係にある。形式は序奏と提示部で全体の半分以上を占め、展開部以降が圧縮されて独特である。

第2楽章：アンダンテ・カンタービレ。3部分形式。サックスの旋律を独奏が引きつぎ、続いていく。中間部では独奏のユニゾンとオーケストラが掛け合い、再び冒頭旋律をサックスが歌って消える。抒情とエキゾチズムあふれる楽章である。

第3楽章：アレグロ・モデラート。序奏とコーダを持つロンド形式（A－B－A－C－A）。第1楽章のモットー音型によって始まり、全体が「循環形式」となる。但し、先は4/4、ここでは2/4でテンポも速い。ロンド部A

の独奏は多彩なフレーズが息つく間もなく繰り出され、B・C部分は調の変化とジャズ風の響きによって対比される。カデンツァ後、最後のAからコーダへ流れ込み、モットー音型が徹底されて終わる。

本作品は2003年の復活演奏を端緒に、片山杜秀氏監修によるCDが話題を呼び、「平成の復活劇」の主役となった。以来、世界的に活躍する指揮者とピアニストによって演奏が続けられている人気作品である。

《交響曲第1番》は1934年4月末完成。編成と楽曲規模の点で戦前の日本洋楽史上で最大クラス。時期的には《コントラバス協奏曲》と双子のようだが趣が全く異なり、この交響曲は分厚く書きこまれている。師のF. コンヴァースも大澤の楽器法に感心したというが、ボストン時代を締めくくる渾身の作である。

作品完成後は、ニューイングランド音楽院院長のJ. グッドリッチが同院オーケストラと初演を試みたものの学生の手に負えず、公開演奏には至らなかった。その後、大澤は35年にコンセール・パドゥルー管弦楽団を指揮して、華麗なパリ・デビューを果たす。この時《第1番》の初演を再び考えたが、大曲のため経費の問題で《第2番》が初演された、という経緯がある。本日は、80年以上も前にボストンとパリで初演を計画されながら、実現ならなかった「幻の大交響曲」の世界初演である。

作品の特徴は《神風協奏曲》と同様の「循環形式」で、早くは《弦楽四重奏曲》(33年)、後には紀元二千六百年奉頌《萬民奉祝譜》(40年)にも循環主題が見られる。

第1楽章:アダージェット。序奏とコーダを持つ自由なソナタ形式。弦で奏される「ハ調」のなだらかな序奏主題で始まり、アレグロの第1主題部の3/4「イ調」から第2主題部の2/4「ロ調」へと続く。479小節に亘る最大楽章で、展開部では新たな主題が登場して序奏主題と共に発展

するなど、大規模な「近代ソナタ形式」の特徴を備える。

第2楽章：アンダンテ。2つの主題を持つ5つの変奏曲とコーダ。クラリネットによる6/8の主題Aを、オーボエによる主題Bが2/4で追いかけ、ヘミオラ*を生じながら両主題が提示される。変奏1・3・5は両主題に基づき、間にA変奏の2とB変奏の4が挟まれる。拍子やテンポの変化と楽想の展開が一体化して、プレストのコーダに向かう。

第3楽章：ラルゲット・ノン・トロッポ。序奏を持つロンド・ソナタ形式（A－B－A－C－A－B－A）。冒頭で序奏主題が遅いテンポで循環し、一転してマーチ風アレグロのロンド部Aとなる。Bは9/8で静かに表情を変え、中央にあたるCはスケルツォ。楽想豊かに各部分が書き分けられ、コーダはスケルツォのリズムを強調して終了する。

尚、大澤の遺品は片山杜秀氏と藤本賢市氏による「発掘」後、2006年に神戸女学院に寄贈され、「大澤壽人遺作コレクション」と命名された。本公演には同コレクションから自筆譜複写やパート譜が提供された。

＊ヘミオラは「3：2」の比を意味する。この場合は6/8の1拍を成す「3つ」の八分音符と、2/4の1拍を成す「2つ」の八分音符が同時進行する。

［生島美紀子（大澤資料プロジェクト代表・音楽学）］

［コントラバス協奏曲］
cb solo－picc / 2 fl / ob / 2 cl / B-cl / 3 fg (C-fg) － 2 hrn / 2 trb － cel / temple block / bass drum / snare drum / cym － hrp － strings

［ピアノ協奏曲第3番 変イ長調 神風協奏曲］
pf solo－picc / fl / 2 ob / 2 cl (Es-cl) / A-sax / 2 fg － 2 hrn / 2 trp / 2 trb － timp－tamb / snare drum / Chinese drum / cym / tam-tam － strings

初演：1938年6月24日 大阪朝日会館
大澤壽人指揮　マキシム・シャピロ（ピアノ）
宝塚交響楽団

［交響曲第1番］
3 fl (picc) / 2 ob / E-hrn / Es-cl / 2 cl / B-cl / 3 fg (C-fg) － 6 hrn / 3 trp / 3 trb / tub － timp － bass drum / snare drum / cym / xyl / tri / cast / tamb / tam-tam － hrp － strings